



イケン先生の『恐縮ですが…一言コラム』

第 577 回 禁止令とドライバー

2014.5.18

小さい子供に水を並々と満たしたコップを運ばせる。

「こぼしちゃ駄目よ！」と言い聞かせて運ばせると、こぼす。緊張のためだ。

ある出来事に遭遇したとき「〇〇しちゃダメだ」「〇〇しなきゃいけない」と命令されると、自由な自分の発想を抑えつけてしまう気持ちになる。

自分を抑え込む方向の心理を「**禁止令**」と呼んでいる。

この禁止令が発令されると、「〇〇しなきゃ」「急がなきゃ」と、必要以上に駆り立て焦らせる気持ちが生まれてくる。自分を駆り立てる方向の心理を「**ドライバー**」と呼んでいる。

今現在は、こうしなきゃいけない理由も、こうあるべき理由も、急がなきゃいけない理由もよくわからない。でも、理由もないのに強く縛られて従いたくなくなる心理＝価値観があり、ことを心理学では「心の悩みのツボ」＝「心の縛り」＝「禁止令&ドライバー」などと呼んでいる。

我々は子育てや家庭の中でも、何気なしにこの禁止令をよく使っている。

「おまえさえいなければ」の思いは虐待を産み、「存在するな」という禁止令となる。「大人の会話に口を挟むな」と言った覚えがあるだろう。これは「お前なんか重要でない」という意味と同じかもしれない。「弟妹の面倒を見ろ」「礼儀正しくしろ」とは、言われた長男は楽しむなど言っているのと同じである。女の子に「歯を見せて笑うもんじゃない」、男の子には「泣くな」といつも言ってきた。一見礼儀作法を教えているようだが、これも「感じるな」という、立派な禁止令である。「おまえが〇〇だったら良かったのにねえ」はおまえ自身であるな、「塾があるんだから遊ぶんじゃない」とは仲間を作るな、「お前みたいな奴が〇〇わけないだろう」は尊厳否定等々、すべて禁止令の常套語である。

「まったく、そんなことをしちゃ駄目じゃないか」「まったく、そんなことしておまえは駄目だね」同じ意味合いで使っているが、前者は、子どもの行為を批判しているのに対して、後者は子どもの人格を批判している。子供とはいえ、相手への気遣いでニュアンスが全く異なる。

禁止令でいっぱいな、不安な家庭環境で育つと、子どもの人格に大きく影響が及ぼされる。それは正に「機能不全状態」となった家族で、傷つきながら育ち、成人になってもそのトラウマを抱えている、こんな人を「**アダルトチルドレン**」と言っている。アダルトチルドレンは当然のように、自分の子供にも同じことを繰り返す。機能不全状態の伝播で、禁止令の益々の拡散となっていく。

冒頭の事例も、「どれだけ上手に運べるかな～」と軽く声をかけてから運ばせると、意外にこぼさないかもしれない。言葉一つで子供の思考と行動が変わる。それは子供への深い愛情、無条件の享受や溺愛ではない、子供の人格を認めてやることだと思っている。